

第一章 莊園社会における寺院法会の意義

Ⅰ 三河国伊良胡御厨における埋経供養を例に

序

序章に触れたように、平安中後期以降に建立された在地寺社は莊園制的編成を受けて存続し、その結果、莊園内部においては、①村落の寺堂・小社、②在地領主の氏神・氏寺、③莊鎮守級の寺社という三要素が存在することとなった。本研究の課題は、これらの寺社が、莊園社会において住人と如何なる関係を有し、かつ如何なる機能を果たしていたかということである。

寺社と他の社会的存在を弁別するのは、教理・信仰に基づく儀礼すなわち修法・祭祀を行ない、それに相応する組織を備えるという点である。特にその社会的機能として、修法・祭祀の執行は重要であり、寺社と社会との接点は、ここに集約されている場合が多い。そこで、以下では特に在地寺社における修法・祭祀に焦点を当て、住人におけるその意義について検討する。しかし、①についての検討は、史料的制約もあり、甚だ困難であると言わざるを得ない。史料の残存度からすれば、体系的なのは③程度の規模の寺社に関する史料であろう。そこで素材としては、③級の寺社において莊官・名主百姓層の参加が確認できる史料を採り上げた上で、①の有する機能についても敷衍して記述を行なうこととする。

まず本章では、在地に関する史料の豊富な経塚史料を採り上げ、埋経供養の過程を復元することで、在地寺院における修法の意義について考察を加えてみたい。瓦経・経筒・紙本経の銘文・奥書には「莊」や「郷」など、供養の行なわれた寺社を内包する莊園公領が明記されることが多く、在地における民衆と宗教の関係を考察するには有用な材料となる。

経塚の研究は、一九二七年の石田茂作『経塚』⁽¹⁾以来、主に考古学・教理学・庶民信仰史の分野で進められ、近年では関秀夫によりその総括がなされている⁽²⁾。一方、文献史学からのアプローチは存外に少なく、これには経塚遺物の多様さに比して、文献史料との突合せの可能な資料が限られているという理由が考えられる。その中でも、三宅敏之⁽³⁾、林文理⁽⁴⁾が、埋経のなされた地域に注目し、結縁者の素性を明らかにして、その背景を考察するなど有益な方法論をとっており、今後継承すべき点は多いと思われる。

本章の素材としては、銘文に見える結縁者および地域を他文献からも明らかにし得る、伊勢市浦口町且過山出土の瓦経を扱う。ここで、資料について簡単な紹介を行なっておこう。

伊勢市浦口町且過山は通称小町塚とも呼ばれ、伊勢外宮の背後、

高倉山・蓮隨山から北方へのびる丘陵に位置する。『勢陽五鈴遺響』
度会郡によれば、天明年間に且過村の唐谷で農夫が「一堆ノ地」を
穿ったところ、数百枚の瓦経を得たという。以後乱掘が進み、遺構
も墓地造成のため旧態をとどめていない。従って埋納状態は確認す
ることができず、瓦経など諸資料も散逸して、様々な所蔵者に分有
されている。資料については、七〇年代から網干善教によって復原
が進められ⁶⁵、和田年弥⁶⁶、関秀夫⁶⁷によって瓦経銘文の蒐集
も丹念に行なわれている。現状では、法華経・無量義経・観普賢経
・大日経・金剛頂経・蘇悉地経・理趣経・般若心経・宝篋印陀羅尼
経・梵字真言・随求即得陀羅尼・金剛界礼懺文の瓦経四百点以上の
他、瓦製五輪塔、陶製光背・台座などの資料が確認される。

小町塚経塚を扱った論考としては、明治期に和田千吉が資料を紹
介して以後⁶⁸、一九三〇年代までに、石田茂作および佐藤虎雄が
整理・分析を行なっている⁶⁹。その後、渥美半島における発掘な
どの成果をふまえ、奥村秀雄が瓦経の焼成地を三河国伊良胡御厨内
に比定し、経塚造営の背後に御厨の生産力を想定するなど重要な指
摘を行なった⁷⁰。以上の他、和田年弥が資料と研究史の整理に基
づき諸問題の総括を行ない⁷¹、また中村五郎が改めて結縁者の整
理を行なつて、神宮と仏教の関係を考察している⁷²。奥村秀雄の
論考を除けば、伊勢からの視点で考察するものが多いが、瓦経の焼
成地は渥美半島であり、供養の行なわれたのも伊良胡の万覚寺であ
る。では、この地において、埋経にいたる一連の過程は如何なる意
義を有したのであろうか。以下、この疑問に答えるべく、前述のよ
うな視点から経塚資料を分析していきたい。

第一節 瓦経銘文における結縁者の構成

はじめに、主要な史料を掲げておく。

【史料1】承安四年（一一七四）五月二十九日銘瓦経⁷³

妙法蓮華経卷第六

承安四年八月午ノ五月ノ庚午ノ廿九日於南閻浮提日本国

東海道三河国渥美郡伊良胡郷□□□□□□

西観之勤進釈迦末法之時妙法蓮□□□□□□

面如法奉書写了大勤進金剛仏子□□□□□□

檀越度会常章

女檀那度会氏子

度会春章

助筆願主等僧良中悲母□□□□□□

散位佐伯国親女弟子磯部□□□□□□

(裏)

員男女子等

佐伯清俊同常吉同四郎同五郎

同六郎同氏子如意同満同犬子等

過去祖父母

女弟子之養父沙弥妙寂養母紀氏

日親之親父三河友吉母嶋氏子

養父母坂本清里物部氏乃至七世四恩

三河友安僧印西 法界衆生等

当御厨前領主度会神主常行

右以結縁書写力如此等與有縁徒衆□

浄土往生證无生法忍預仏記捌得□□

先来此界引導有縁人訪无縁者乃□□

△於一切衆生▽

界分身散影和光同塵下蘇結縁□□□

至一切智地如彼普賢觀音等□□

【史料2】承安四年(一一七四)七月日銘瓦經しし

僧相西尼如来尼歡喜入道尼妙法僧定宗尼仏種字清

四郎大秦氏平氏黒犬同小犬荒木田五郎子沙弥染弥尼妙法

太郎

藤原醫王丸伊勢太郎丸国栖五郎丸乙若丸僧行祐勇勢

僧玄海平下野一志氏伴氏同氏同氏

承安四年八歳次甲午▽七月 日於於南閩浮提日本国東海道三河

国渥一美郡伊良期郷万覚寺釈迦末法時衆躰仏像衆菴

塔婆衆部妙典釈迦末法時以後百歳闍靜固此

奉造願諸写畢 大願法主沙門西観

大檀越度会常章度会氏子仙王愛子同瀧寿

同心檀越度会春章大中臣氏

同心助成施主佐伯国親女大施主磯部氏員愛子等

同心助楯筆師金剛仏子印西金剛仏子遵西僧□

僧兼仁僧聖賢僧慶印僧教春僧良中入□□

同山一門徒衆僧長源藤内縁友地藏堂□□

僧聖心大中臣氏同定田尼上大中臣正長大中臣右見

まず、銘文に見える結縁者を整理してみよう。

1. 勸進僧(願主)および同心願主等

史料1に「西観之勸進」とある他、2に「大願法主」、小町塚出土・陶光背(『経』二八九)に「大願主」として西観の名が刻まれている。願主とは埋経行為を始めた主体を示すが、この場合、勸進

僧イコール大願主である。銘文のように彼は「伊良期郷万覚寺」の僧であつたと思われるが、推定領域内には万覚寺と号する寺院は存在せず、史料的にも平安期まで遡ることのできる寺院はない⁽¹⁾。一方、後述するように、渥美町の保美からも瓦経が発見されているが、東大寺瓦のようにこれも湊への運搬中に落とされた可能性があり⁽²⁾、必ずしも寺院の所在を示すものではないようである。

瓦経作成の手順からも、寺院は後述する瓦窯の近傍に存在したと考えられるが、この点で注目されるのが、堀切字除地に存在する常光寺である。寺伝では、応永二十二年（一四一五）に聖観音を安置するため建立された慧月庵が、応仁年間の潔堂義俊の巡錫によって曹洞宗常光寺となつたという。天保まで寺地は堀切の浜辺にあつたが、「常光寺文書」延享元年（一七四四）三州渥美郡堀切村常光寺小末寺帳によると、近世には、伊良胡の円通院、小塩津の正福寺、保美の豊山寺、亀山の亀鶴院、中山の西湖院、竜源院、小中山の医王寺、高木の蔭涼寺などを末寺としており、この地域においては、最も勢力の強い寺院であつた⁽³⁾。この前提としては、堀切の常光寺が曹洞宗の流入以前に、御厨における寺院の中心的役割を担つていた事情が考えられる。一方で、御厨近隣の医福寺（大字和地）、南岑寺（大字江比間）、東仙寺（大字馬伏）、誓眼寺（大字八王子）などの由緒を遡ると、かつては天台宗の寺院であつたという。特に大字山田の泉福寺は現在も存続する天台宗寺院であり、同寺蔵の金銅薬師如来坐像銘に「嘉禎参年」とあることから、鎌倉期以来の寺院であることが確認できる。中世の渥美においては、この泉福寺を中心として、天台寺院の勢力が強かつたものと思われる。可能性として、そうした天台寺院の一つに万覚寺があり、それが常光寺の前身であつたのではないかという推測を行なつておく。

次に、先の陶光背には同心願主として尊西・永中があるが、前者は他の瓦経（『経』二八四）に筆者僧として見える「導西」、史料1に同心助楯筆師として見える「遵西」と同一人、後者は史料1に助筆願主として見える「僧良中」と同一人であるろう。瓦経の作成において、字面の省略や誤刻が多く、右の人物が供養において与えられた役割の一致からも、この推定は不自然なものではない。

この他、筆者僧としては、他の瓦経（『経』二八四）に観道・聖賢が見え、史料2に同心助楯筆師として印西が見えるが、彼らは勸進僧に協力して、瓦に経典と意趣文を刻んだ人々である。

なお、先の遵西については、朝熊山十九号経塚出土の平治元年（一一五九）銀経筒銘（『経』二四九）にも名が見え、伊勢山田郡常覚寺の僧侶であつたと思われる。常覚寺と万覚寺の間には何らかの関係が想定できるが、ここでは伊勢と伊良胡双方の寺院から供養に参加した僧侶があつたことのみ確認しておく。

2. 技術に関わる者

(a) 仏師としては、前掲・陶光背に隆円の名があり、他の陶光背（『経』二八三）には「作者僧隆円」とある。この場合、仏師隆円は陶製の仏像を制作したのであろう。

次に(b)瓦工であるが、他の瓦経（『経』二八四）に、

【史料3】

承安四年甲午五月廿七日納

五部秘経両部曼陀羅

導西

筆者 観道

聖賢

瓦工 八三河國

平四郎

とあり、三河国の平四郎が瓦を作成している。伊良湖には東大寺再興の際に使用された瓦窯跡が存在し、「東大寺大仏殿」銘の軒丸・軒平瓦の他、小町塚瓦経と筆致の共通する法華経第二と大日経第四が出土している⁽¹⁾。また、瓦窯跡（字瓦場）の付近には「平四郎田」「平四郎構（ヶ前）」の地名も残され、先の瓦工・平四郎との関係が推測されている⁽²⁾。保美の宇宝海の山裾からも、側面末尾に「書写奉聖賢」という銘を持つ瓦経が出土しているが⁽³⁾、以上から小町塚の瓦経は、伊良湖に住する瓦工が、伊良湖において焼成したことが確認できよう。

なお、先の陶光背（『経』二八九）には「藤井成重」の名が見えるが、これは宇治山田世義寺出土の陶製経筒に見える「造手藤井成重」と同一人と目される⁽⁴⁾。藤井姓は、山城・伊勢・岩代の経塚資料によく見られるもので、これを木工寮の工人と結びつける見解もあるが⁽⁵⁾、藤井姓は現在、渥美の和地に多く見られるものであり⁽⁶⁾、瓦経の製作時には伊良湖へ定着しはじめていた可能性がある。以上の例から、上記の工人は伊良湖に基盤を置き、在地の寺院のみならず、伊勢方面からの要請にも応じて、種々の仏具を作成していたことがうかがえる。

3. その他僧形の者

煩瑣になるので、逐一どの部分に登場するかは記さないが、関係史料に名を現すのは、以下の人々である。

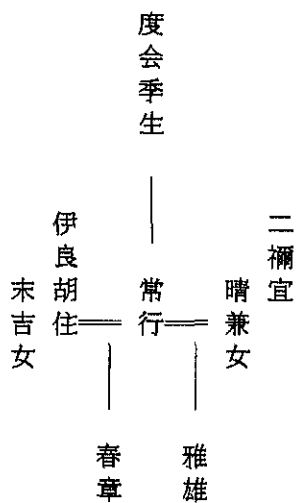
金剛仏子定源太郎能口、沙弥一楽、僧中楽、二楽、僧永真、僧寛郎、字教音僧寛新、僧教春、行西、僧行祐、僧玄海、源西、沙弥参西、常光入道、僧定宗、僧定舜字熊王、僧聖心（大中臣氏）、僧千林、僧相西字三郎、僧東海字高大、妙清、勇勢、沙

弥楽西（高階氏）、沙弥楽弥（荒木田氏）、比丘尼阿妙、尼敏喜入道、尼西妙、定田尼上（大中臣氏）、尼如来、尼仏種、尼妙念、尼妙法（荒木田氏）

在俗の者も含まれるだろうが、史料2に「日本国東海道三河国渥美郡伊良期郷万覚寺」「同山一門徒衆」とあることから、右の僧形の多くが万覚寺の関係者であることは推定してよい⁽²⁴⁾。一方、埋葬されたのが伊勢外宮の近辺であることから、先の遵西のように神宮周辺の寺院の僧侶が含まれていることも考えられる。僧名の大中臣・荒木田氏についても、神宮の祭主・禰宜層であろう。右の人々には、伊良胡と伊勢双方からの結縁僧が含まれ、また神宮の関係者も万覚寺の組織に入り込んでいると考えられる。

4. 檀越（檀那）

大檀越としては、度会春章、度会常章（同心壇越）、女檀那として度会氏子（仙王）⁽²⁵⁾、その子女と思われる瀧寿子の他、度会雅雄の名が見える。また、度会常行は永暦元年（一一六〇）十月に死去しており⁽²⁶⁾、ここでは過去尊霊として扱われたのであろう。諸系図によつて、右の人々を整理すると次のようになる⁽²⁷⁾。



常章の名は諸史料・諸系図に見えないが、常行・春章の名との比較から、春章の兄弟であった可能性は高い。また、春章には「姉尼公」があつたことが確かめられ⁽²⁸⁾、度会氏子がそれに当たる可能性もある。一方、中村五郎は常章の実名を「彦章」とし、先の度会氏子を妻として常行の婿となつたのでないかと推測している⁽²⁹⁾。確実な史料が存在しないため判断をつけかねるが、右の人々が常行の子女（婿を含む）であつたことは動かせないであろう。なお、常行が伊良胡住人の娘を妻としたことについては後述する。

同心助成施主としては佐伯国親があり、女弟子大施主の磯部氏はその妻と考えられる⁽³⁰⁾。彼らの子女には、命義子・愛寿子の他、佐伯清俊・常吉・四郎⁽³¹⁾・五郎⁽³²⁾・六郎・氏子如意・満・犬子がある。また「過去」すなわち尊霊としては、佐伯国親の父・三河友吉、母・嶋氏、養父・坂本清里、養母・物部氏、女弟子磯部氏の養父・沙弥妙寂、養母・紀氏および祖父母が挙げられている⁽³³⁾。

この他、銘文中の「三河友安」は三河友吉の親族であろう。三河の名字から見ても、彼らは伊良胡の住人であり、一方の磯部氏や嶋氏は伊勢・志摩を本貫としていたであろうから、これは伊勢灣を越えた婚姻を示している可能性がある。

この他、同心檀越として大中臣氏某があり、また同氏には乙若丸・正長・右見の名が見られるが、他の詳細は不明である。

以上、主要な檀越として、度会・大中臣・佐伯・磯部の四氏があり、一・二代前の親族を過去尊靈として銘文に載せる者のあること、また彼らのうちには伊良胡の住人も含まれていたであろうこと、これらの点を確認しておく。

5. その他の氏

これも煩瑣になるので出典を記さないが、関係史料には次の氏名が見える。

(a) 荒木田五郎・太郎、(b) 飯高清里、(c) 伊勢太郎丸、(d) 字清四郎
大秦氏、(e) 国栖五郎丸、(f) 平氏黒犬・同小犬・平光末・平二郎
丸字文殊・平口助平・平下野一志氏（一志氏は別か）、(g) 丹治
貞弘、(h) 伴氏同氏、(i) 仲原清信、(j) 丹生氏、(k) 秦存犬、(l) 日前
守口、(m) 藤原菊元・藤原氏子・藤原醫王口、(n) 平群常？、(o) 源
貞清・源行貞・源長清、(p) 山吉成、(q) 字四郎山口氏、(r) その他
・口部久光（物部・磯部氏か）

なお、(a)の荒木田氏については、近年和田年弥の紹介した瓦経拓本に「荒木田清房入道」があることを付け加えておく。以上の他、無姓の人々としては、阿波子・阿古丸・字曼殊・字葉？・毘沙王・宗行・口位丸・宗頼・近則・中雅実（大中臣氏か）がある。これらは檀越以外の在俗者であり、法会の聴聞などの形で供養の周縁部を構成するものであったと思われる。

以上、瓦経に見える結縁者を整理してきた。従来の理解においては、瓦経銘に見える人名が、神宮近辺の経塚資料のそれと一致することから、小町塚経塚は伊勢の寺院との関係で論じられることが多かった。しかし、菩提山経塚出土と言われてきた瓦経が小町塚のものと同一とすると、⁽³⁾、実際に複数の人名の一致する例は朝熊山経塚のものしかなく、そのうちでも一致するのはわずか三名に過ぎない⁽⁴⁾。となると、先の結縁者について、伊勢の寺院との深い関わりを想定できるのか、という疑問が生じる。そこで、若干視点を変え、瓦経作成の過程から右の問題を考えてみたい。

小町塚の瓦経は承安四年（一一七四）銘であるが、それぞれの月日は微妙に違っている。順次挙げれば、五月十一日、同二十一日、同二十六日、同二十九日、六月某日、七月六日となる。少なくとも五月上旬から七月上旬までは、連日のように瓦経に文字が刻ま

れ、瓦窯に運ばれていたことになる³³⁾。焼成地は前述のように伊良胡御厨内であり、勸進僧が伊良胡の万覚寺の僧侶であるから、刻銘は万覚寺の内部で行なわれたはずである。となると、右の期間に一紙半銭を持参して供養に加わり、瓦経に名を刻んでもらう雑多な在俗は、果たして伊勢の住人なのであろうか。また、檀越・施主にしても、例えば度会氏は伊勢の人間なのであるから、瓦経の焼成が伊良胡であつても、数か月におよぶ供養を万覚寺に一任する必要はなく、神宮近辺の寺院で行なえば済むはずのことである。万覚寺において供養が行なわれた事実の背後には、檀越層すなわち度会・佐伯・大中臣などの諸氏が、それ以前に万覚寺と密接な関係を有していたという事情が想定される。以上から、瓦経銘の結縁者に伊勢からの参入者があるにしても、従来よりは更に伊良胡の側の比重を高く考えねばならないと思われる。

では、この伊良胡とは如何なる空間であり、そこにおいて先の人々は如何なる位置を占めていたのであろうか。次節では、伊良胡御厨についての荘園史的考察により、右の課題に迫ってみたい。

第二節 外宮領伊良胡御厨と諸氏

(1) 伊良胡御厨の形成と構造

瓦経からは、埋経供養の参加者が主に伊良胡御厨の住人であつたことが分かるが、では彼らはどのような立場にあつた人々であらうか。まず、御厨についての荘園史的考察から始めよう。

【史料4】伊勢神宮神領目録³⁴⁾

伊良胡御厨内外▽ 給主同宮権神主貞村等

已上件神領等、子細見于嘉承注文、永久宣旨也

この当時の給主は「貞村(材)」³⁵⁾で度会氏であり、また永久年間には外宮領として確定していたようである。

御厨の領域については、現在も「御厨七郷」の伝承をもつ島(福江)・保美・中山・龜山・伊良胡・堀切・小塩津の集落があり、近世の『三河国聞書』では「伊良胡御厨トハ今龜山村、中山村、堀切村、小塩津村、島村、保美村、以上六ヶ村也、又御厨原ト申ス所モアリ」としている。一方、「鐮矢伊勢方記」年月日未詳度会行文処分状写(『鎌』三七・二九〇三三)には、

【史料5】

(前略)同国伊良古御厨内小中山以下買得、井女子分之高菰・堀切・胡塩土分三分、国行・繁行・行古、各能悪平均三人同可

とあるが、「小中山」は現在の小中山、「堀切」は堀切、「胡塩土」は小塩津に比定できる。高萩は『三河国聞書』に見えないが、現在の高木集落のことであり、とすれば現・古田もまた莊域に含まれていたであろう。御厨の領域としては、渥美半島突端部から高木と小塩津を結んだ線までを考えるのが妥当と思われる⁽⁴¹⁾。

伊良胡の地は、平城宮出土木簡による知見から、古代においては調塩を貢納した渥美郡大壁郷（飽海評大鹿部郷）であつたと目されている⁽⁴²⁾。一方、西ノ浜一帯と天白川流域に分布する製塩遺跡からは、平安期の壺・山茶碗・瓷器が出土しており⁽⁴³⁾、伊良胡における製塩は主に右の二地域を中心とし、古代を通じて続けられていたと見られる⁽⁴⁴⁾。さらに、『続後撰和歌集』巻十二・恋歌二に藤原道経が「玉藻かるいらごのあま」と詠み、『続後拾遺和歌集』巻三・夏歌に大江匡房が「あまのかるいらごが崎のなりのそ」と詠んでいる通り、伊良胡においては「玉藻」「なのり（海苔）」を採取する海人の存在が確かめられる。

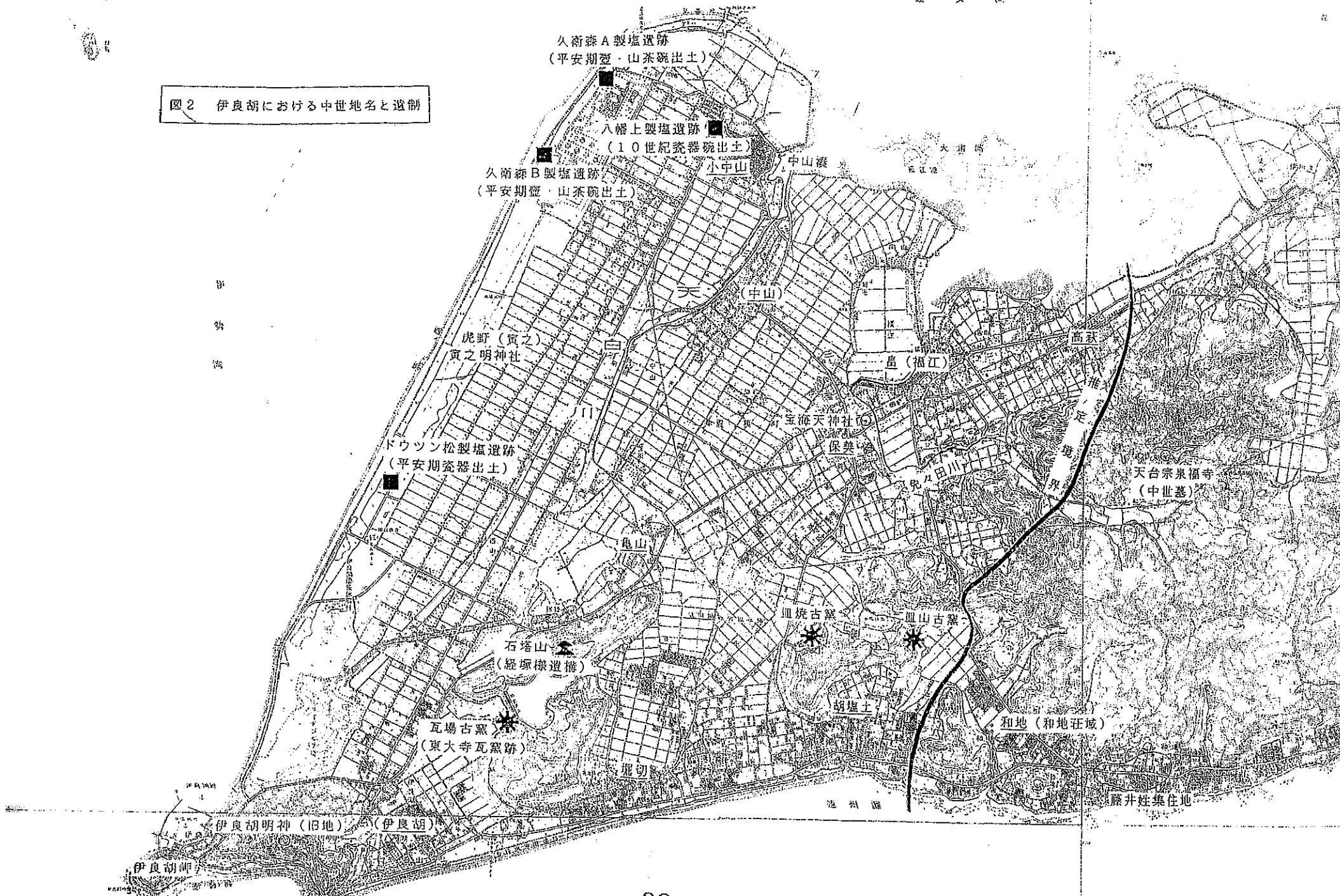
一方、『山家集』下に「いらごへ渡りたりけるに、る貝と申す始にあこやのむねと侍るなり、それをとりたるからを高くつみおきたりけるを見て」とあり、『夫木和歌抄』巻題廿六に西行が「波もなしいらごが崎にこぎ出てわれからつげるわかめかれあま」「沖のかたより風のあしきとて鯉と申すいを釣りける船どものかへりけるを見て。いらご崎にかつをつる舟ならび浮てはがちの波に浮びてぞよる」と詠んだように、海人は海藻や貝を採取する一方、黒潮に乗って北上する鯉を捕らえていた。近年の漁業史研究においては、こうした漁撈活動が、背後の水田における農耕と複合的に営まれていたことが明らかにされている⁽⁴⁵⁾。伊良胡における古墳の分布からすると、住居や水田の中心は、先の二地域の他、①伊良胡の宮山から堀切にかけて、②小塩津から和地にかけて、③福江から保美にかけて、の三地域が考えられ、③については免々田川の流域にN27[°]。Wの小規模な条里遺構がある⁽⁴⁶⁾。前掲の集落名で言えば、中山・小中山・堀切・小塩津・保美など、海浜の平地と河川の流域が古代における生産力の中心であつたと推測される。

以上の集落を有する伊良胡は、正式に外宮領となる以前にも伊勢・志摩方面と強い結びつきを持っていたと思われる。古代においては、伊勢・志摩から東の島々を通じて神島・伊良胡岬へ、北上して羽豆岬・矢作川河口へ、というコースが根強く存在し、それを基盤として、渥美半島先端部から幡豆郡・矢作川河口までは「ハズ」と称される一つの地域を形成していたと見られる⁽⁴⁷⁾。また、近年の交通・流通史研究からは、伊勢から東国方面への海上ルートが古代

図1 伊良胡における古墳と製塩遺跡
(●は古墳、▽は製塩遺跡を示す)



図2 伊良湖における中世地名と遺制



にまで遡ることが確かめられ⁴⁸⁾、右の交通体系においても伊良胡は伊勢・熊野と東国を結ぶ結節点として機能していた⁴⁹⁾。

従って、神宮の側からは早期に伊良胡への注目がなされていた筈であり、伊良胡の住人からも私的な贄貢納などが行なわれていた可能性が高い。例えば、杉江道雲『伊良胡名所記』（元禄六年）に引く伊良胡明神の縁起によると、嘉祥元年（八四八）正月、伊良胡の村童に「太神宮」が乗り移り「永ク漁獵ノ祈ヲ叶ヘ舟船ノ憂ヲ守ル」ため伊勢からの勧請を訴えたので、その旨を伊勢の神職に通達し、太神宮を伊良胡の地に分祀したという。嘉祥は嘉承の偽称と目されるが、後者の年号とすれば前掲史料から見ても信憑性の高いものである。右の伝承は、外宮領への編成の背後に、漁撈・舟運への祈願という、前代からの民衆願望が伏在していたことをうかがわせる。

以上、伊良胡は製塩・漁撈・農耕という生業複合と海運上の重要性を基盤として外宮領に編成された。『神鳳抄』⁵⁰⁾に「伊良胡御厨八上分三石雜用卅石√」、「外宮神領目錄」に「伊良胡御厨三石干鯛三十俵」⁵¹⁾とあるが、これは一般荘園の本所分に当たるものであり、実際には右の生業に基づいて更に多量の貢納物が、御厨給主（外宮禰宜度会氏）の手に入ったと推定される。

(2) 御厨における諸氏の位置

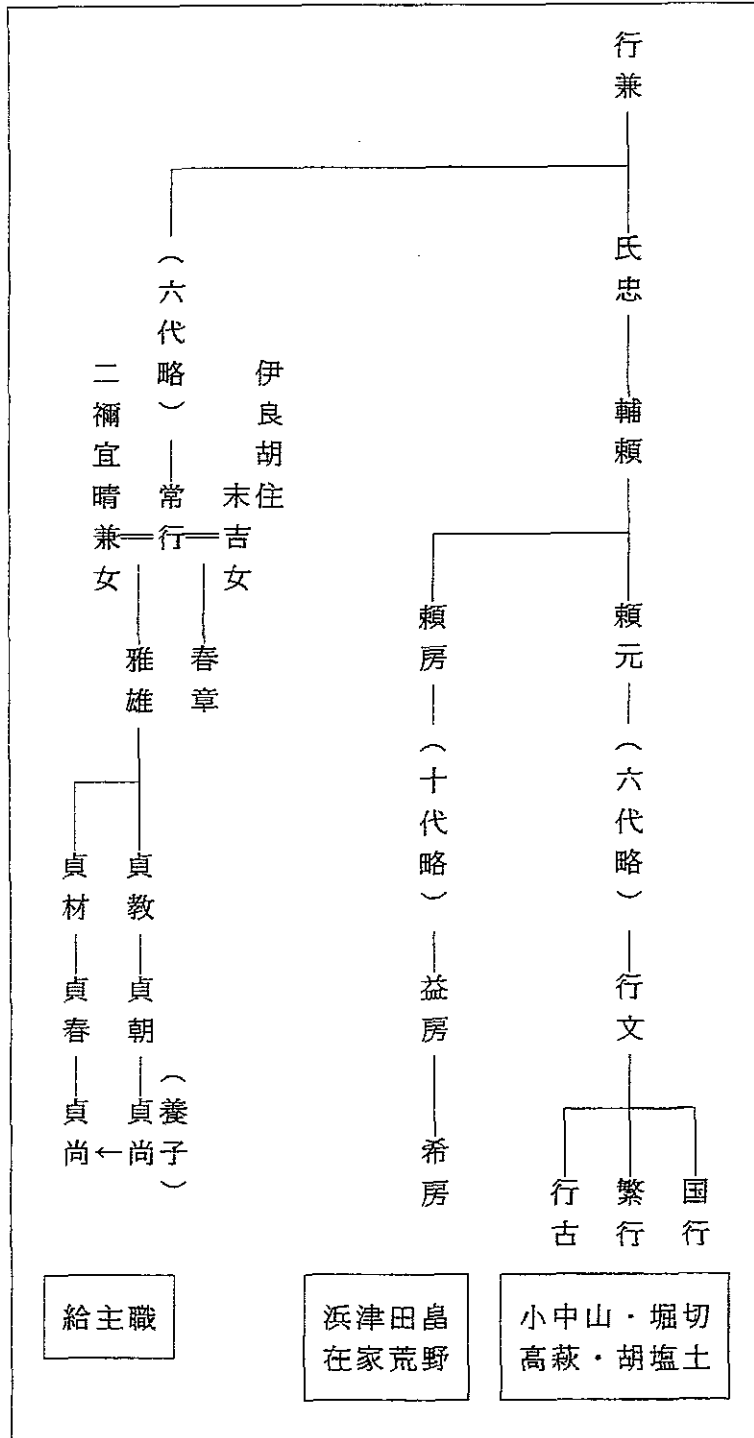
瓦経には、御厨の前領主として度会常行の名が刻まれていたが、この人物は先に掲げた御厨給主の「貞村（材）」⁵²⁾とどのような関係にあるだろうか。「度会系図」（『統群書類従』七・下）に「貞村（材）」は現れないが、「類聚大補任」（『神道大系』神宮編五）によれば、彼は承久三年（一二二一）に外宮正禰宜であり、系図中の度会雅雄の子息、つまり常行の孫であった。

また、弘安九年（一二八六）に御厨を領知している度会貞尚（後述）は「貞村（材）」の実の孫である⁵³⁾。御厨・御園の給主はほぼ領家・預所職に当たるもので、禰宜庁の構成員たる度会・荒木田氏が補任されることが多いが⁵⁴⁾、伊良胡御厨の給主職は、右の系統に相伝されていったのであろう。

この他、前掲史料により度会行文が、御厨内の小中山等を買得地を持ち、胡塩土・堀切・高萩にも田地を有し、これを三人の子息に配分しており、また度会益房も「浜津在家荒野」を子息希房に譲渡している⁵⁵⁾。詳しくは略系図を参照されたいが、先の系統以外にも沽却地の買得などにより、御厨内に所領を有した度会氏が存在したのである。

これらの人々は神宮の禰宜層であることから、在地性は希薄であると考えられがちだが、実際には御厨と日常的に密接な関係を保っていたと見られる。常行の子息・春章の母が「伊良胡住末吉女」で

図3 伊良胡御厨関連・度会氏略系図



あつたことは既に述べた。つまり、度会常行が妻としたのは、伊良胡御厨の住人であつたのである。正治二年（一二〇〇）に春章は五十三歳であるから、父母の婚姻はほぼ久安年間であつたことになる。御厨の外宮領としての編成はこれに先立つが、久安頃には度会氏はさらに御厨との関係を深めていたのである。こうした婚姻形態が特殊なものでないことは、『古今著聞集』巻第十六、興言利口に「外宮の権禰宜、度会の神主盛広、三河国なる女を迎へて妻にしたりけるに」とあることや、遠江国鎌田御厨でも給主が在地の一族の娘と婚姻している例から推測されよう。この背後には、先に見たような三河湾および太平洋における、神宮と御厨間の頻繁な交通が影響しているものと思われる。

右の他、御厨内に所領を有したと見られる一族に、祭主である大中臣氏の存在がある。『勘仲記』弘安九年（一二八六）十二月三日条によれば、外宮一禰宜の度会貞尚と前神祇権少副の大中臣隆逸（岩出流）の間で、御厨領の相論が起こつている。

御厨に関わる論点は、①御厨における武家被官・甲乙人の知行地は、「貞応関東状」によつて、幕府が没収し伊勢神宮に返付され、貞尚が領知していたが、それに対し隆逸が「貞応関東状」を貞尚の「謀作」としている、②御厨内の神田のうち、幕府没収・返付の分については貞尚の知行であるが、貞尚は「貞応関東状」を楯にして神田内の京都被官知行地にまで、徳政を拡大しようとしている、というものである。伊良胡御厨は、建久十年（一一九九）三月に地頭職が停止されているが、承久の乱後（貞応年間）、再びその旨が確認されたのであろう。また、御厨には一時期、武家被官の他、京都被官の知行地が存在した可能性がある。

重要なのは、大中臣隆逸が貞尚の領知を訴えていることであり、これは彼自身が御厨の内部に何らかの所領を確保していたからである。一般に祭主（大中臣氏）は各地に神戸の他、祭主分附地を持ち、祭主の交替ごとに還付していたが、祭主家の固定により別相伝地となつていった。鎌倉期を通して、大中臣氏は右のような所領を御厨内に確保したものと見られる。この隆逸の系統と、瓦経に見える大中臣氏との関係は不明であるが、祭主・大中臣氏も度会氏と同様に御厨との関係を深めていたことを確認しておきたい。

次に、荒木田氏の場合を見てみよう。清田和夫の紹介した、大正七年十二月十六日の中山村社由緒調には、寛保年間（一七四一〜四四）、「土地ノ敬神家」であつた「度会広文」の記した「鎮守御鎮座並二摂末社勸請考」を引用している。

【史料5】

曾テ聞ク、三河国渥美郡中山村鎮守神明宮八堀河院御宇康和年

中伊勢ノ神官荒木田某、御厨見聞ノ為メ此地ニ来タルキザミ、此西ノ海岸虎野ト云ヘル地ニ初メテ一社ヲ勸請シ、大明神ト称シ奉ル、コノ時イマダ中山ノ里開ケズシテ、只西山ノ内、虎野辺ニ漁師ノ家七八軒アリテ、右ノ大明神ヲ齋キ奉リケル、式百余年ノ間ナリ（後略）

ここに言う中山村鎮守神明宮は、同史料の後半部によれば寛永十五年に「虎野」の地から移したものであり、貞治三年（一三六四）以前に成立したと見られる「三河国内神明名帳」における渥美郡の「従三位寅之大明神」である可能性が高い⁶¹。右の所伝では「康和年中」に「伊勢ノ神官荒木田某」が「御厨見聞」に訪れ、西浜の「虎野」に神宮を分祀したという。康和（一〇九九—一〇四）の年号は、伊良胡御厨の成立と極めて近く、また一社を勸請したという行為も、先の伊良胡明神の例などからして⁶²、不自然なものではない。荒木田氏の一部は、度会氏が給主を務める一方で、伊勢から下向して土着し、開発を進めたのではないかと思われる⁶³。

以上の他、瓦経銘文に見える施主・佐伯氏やその妻・磯部氏も以上のような立場を保持していた可能性があらう。瓦経に見える結縁者は、従来考えられていたよりも多く、伊良胡御厨に本拠を持つていたことが想定されるのである。一般荘園で言えば、彼らは荘官名主層にあたる人々であり、彼らによつて追善を受ける亡き父母や養父母は、給主をはじめとして、御厨成立時における最初期の荘官名主層であつたと思われる。彼らが万覚寺の勧進に加わつたのには、彼らが生活の基盤を伊良胡に持ち、免田・寄進田を与えるなどの形で万覚寺の檀越となつていたという事情が考えられる。では、彼らにとつて埋経供養は如何なる意義を持ち、また如何なる事情で、伊勢の小町塚に瓦経が埋納されたのであろうか。次節では寺院側における埋経の意義を確認するとともに、右の課題について考察を加えてみたい。

第三節 伊良胡御厨における埋経供養の意義

(1) 寺院における埋経の意義

まず、寺院側からする埋経の意義を再検討しておく。

経塚は一般に、①埋経の経塚、②納経の経塚、③一石経の経塚に分類され、①は主に平安期に如法経書写供養と関連して築造されたもの、②は鎌倉末以降、廻国の六十六部聖が関与したもの、③は室町期から近世にかけて、一石に経字を書いたものが庶民によつて納められたもの、という性格を持つ⁶⁴。小町塚の経塚は①に属するもので、瓦経は仏法の久遠を企図したものとされる⁶⁵。

一般に埋經の發生は、十世紀末の天台における如法經供養との関連で理解されている⁶⁶⁾。これについては、所依の經典が法華經であること⁶⁷⁾、銘文に見られる「願以此功德、普及於一切、我等与衆生、皆共成仏道」の言辭が、法華經化城喻品における梵天王の勸請の詞であり⁶⁸⁾、「法界衆生、平等利益」という供養願文の詞も法華經への礼拝の言辭であること⁶⁹⁾、鎌倉期まで降るが、埋經供養の作法を記したものが、天台の書物であること⁷⁰⁾、早期から地方における埋經供養に天台僧の関与が見られること⁷¹⁾、などの事実からも支持することができる。

埋經供養と源信の関連も指摘されているが⁷²⁾、筆者もまた埋經供養が源信によつて体系化されたのではないかと考えている。源信の弟子で二十五三昧結衆の一である覚超が、永延三年(九八九)和泉国某郷で埋經を行なったのは著名な事実であり、史料的にはこれが埋經の初見となる。当然、源信からの影響が想定されるが、源信には埋經供養に関する著作もあつたらしい。

永保三年(一〇八三)豊後津波戸山出土經筒銘(『經』二五)には、「如法書写妙法蓮華經一部并結緣集一遍集各一卷」と刻まれている。法華經とともに、「結緣集」および「一遍集」が書写されているのは、それが埋經の作法や功德を説いたものだからであろう。ところが、『諸宗章疏録』二(『智山全書』二〇)、『山家祖徳撰述篇目集』卷下(『智証大師全集』下)などによれば、これらはいずれも源信の著作であり、また「一遍集」は「結緣集」の一部であつたという⁷³⁾。つまり、源信には埋經供養に関わる「結緣集」という著作があつたのである⁷⁴⁾。

「結緣」の語は、竊然が指摘したように、法華經化城喻品に典拠があり⁷⁵⁾、そこでは、①「下智下根」の衆生に対し、遠劫から現在まであらゆる場所で法華經が説かれ続けること、②大通智勝如来く十六沙弥く釈迦く仏弟子という法華覆講の継承を基礎として、現在もまた沙弥が法華講を行ない得ること、すなわち衆生を仏道に善導する者が眼前の僧侶に他ならないこと、が説かれている。源信もこの語を重視しており、「二十五三昧起請」「八箇条起請」(『恵信僧都全集』一)においては、不断念仏衆(結衆)が「結緣知識」「吾党之人」と称される他、『往生要集』卷上・大文二にも「第六引接結緣樂」として「結緣」の功德につき一項が割かれている。源信においては、供養法会に参集する同心の僧侶が「結緣知識」なのであり、さらに寺外の俗人をあらゆる手段で仏法に引接することも「結緣」とされたのである。「結緣集」が埋經供養を説いた著作であるならば、その行為は上述の文脈から、僧伽の結合を高め、世俗を法華經の下に参集せしめる「結緣」の重要な手段として意識されていたと思われる。經塚資料に「結緣」の語が頻出するのは、こ

のような背景が存在したのである。僧侶と檀越の関係を基盤とし、技術者をも内包して造物と供養が行なわれる点で、「結縁」は古代における「知識」の系譜を引くものと推測されるが⁷⁾、その体系化には右のような天台教学が深く関わっていたと思われる。

以上、埋経が世俗へ働きかける「結縁」の重要な位置を占めることを確認したが、一方世俗の側からは、それは如何なる機能を持つものとして理解されたであろうか。覚超が永延三年（九八九）、和泉で埋経を行なった際の「修善講式」を見てみよう⁷⁾。

【史料7】

（前略）此処ハ是レ部内ノ大衆ノ有縁□□子ノ勸ニ依テ過去現在ノ父母先祖近親并郷内ノ有縁无縁ノ存亡□輩ヲ計ヘ其ノ為ニ□仏ヲ捺シ又彼輩及自身并□界衆生平等利益ノ為ニ仏ヲ図シ経ヲ書テ率堵婆ヲ立テ其ノ基ニ二件ノ仏経并人々名帳ヲ埋納テ靈驗ノ仏地ヲシテ毎年今日恭敬□□奉ル也

（中略）今已に三宝を奉礼了ぬ。其功德无量无边也。即以此功德は自他法界平等に利益せん。就中て此郷内の有縁無縁の一切の靈等、怨敵をも親友をも皆共に引導せん、現在結縁諸人各滅悪業して現世後生共に安樂にして皆共に仏道成らん（後略）

覚超は、この某郷の池辺氏の出身であり、埋経には血縁者への追善という意義が看取される。また「郷内」における一切の亡者の鎮魂のため名帳を作成し、それを卒塔婆の下に埋めるというのが、それがこの郷における墓所であった可能性は高い。

「如法経現修作法」（『大正新修大藏経』第八四）には、如法経筒の奉納場所について「奉納所横川如法堂。其外靈地聖跡等。或所住之寺。或亡者墳墓之近辺。随意不定也」と記している。また「如法経雑事」⁷⁾にも、

【史料8】

一。奉納事

或本所入如法堂辺▽或靈所靈社辺。或墳墓砌。各可在願主意樂入其間雑事不違具記▽

とあり、願主の意によって埋納場所を変え、時には墓所の近辺に埋経することを示している。埋経は当初から亡者への追善と強く結びついており、檀越層たる世俗にとっては過去尊靈の鎮魂と浄土往生が期待されていたのである。埋経の意趣としては平安期、弥勒出世と追善供養・証大菩提とが平行して存在したことが指摘されているが⁷⁾、間壁忠彦・間壁葎子の指摘にもあるように、埋経の意趣に

は当初から種々の信仰が内包されており、むしろ浄土思想と数量的功德主義の比重が高いのではないかと思われる。ここでは、特に埋経が当初から過去尊霊への思慕を基盤として世俗に受容され、寺院の側からは法華経を衆生に伝える「結縁」の重要な手段として意識されたことを確認しておく。

(2) 御厨住人における埋経供養の意義

「結縁」としての埋経は、多大な時間と労力を要し、莫大な資財を檀越層に負っており、檀越の側の強い宗教的欲求が存在しなければ、到底実行され得るものではない。先に見た通り、埋経は当初から檀越による過去尊霊への追善を中核としていたが、小町塚の埋経の場合はどうであろうか。

ここでも、やはり「過去祖父祖母等」への追善が看取される。銘文には佐伯氏のそれも見られるが、むしろ尊霊の中心は「当御厨前領主」と銘記され、その子女が大檀越となつている度会常行である。おそらく、御厨給主職を最初に獲得したのは常行であり、それが子女により刻銘のかたちで確認されているものと思われる。そして、埋経供養の追善を受ける中心が度会常行だとすると、何故伊良胡万覚寺で作成された瓦経が小町塚に埋納されたのかという疑問にも回答が可能になる。

小町塚が外宮の西北に位置することから、これを西方浄土と結びつけ、小町塚を西方の聖地と見立てたとする意見がある。しかし、神宮周辺には世義寺・永代山・八塚山・菩提山・朝熊山などの経塚が存在するのであり、これらは神宮の西方に位置するものばかりではない。むしろ注目したいのは、小町塚がかつて「墓山」と言われ、江戸期には荒木田・度会氏の墓所として知られていたことである。経塚が墓所と深い関連を持つことは先に述べたが、これはまた、近年の中世考古学の成果によつても裏付けられている。一の谷遺跡では、十三世紀後半以降の墳丘墓が発掘され、その前段階の層からは灰釉陶製器を伴う土壙群が出土し、墳丘墓盛土の中から十二世紀中葉後葉の渥美・瀬戸の灰釉陶製壺類破片が発見されている。奈良県広瀬地蔵山墓でも、中世の墳丘二基から経筒と思われる瓦製筒形容器が発見され、周辺には土壙墓が存在する。京都府の権現山遺跡では、墓壙を切る形で埋経土壙が掘られていることから、埋葬後のある時点で墓と経塚一体のものが築かれたと目されている。墓所に経塚が築かれることは、中世においては一般的な形態であつたと思われる。石組などの遺構が確認できないことに若干疑義を残すが、小町塚からは平安期と推定される陶製宝塔が出土しており、これは経塚の地上標識（供養塔）としての性格を持つていた可能性がある。つまり、小町塚には度会氏の墓

所としての性格があつたのではないだろうか。

神職の家においては、神との関係から継承はその氏人に限られ、父系血縁者であることが条件となり、早期に父子継承が定着していたと言われる。こうした継承を正当化するのには、老親の養育と死後の報恩であり、それは在地の集団によつて相続を承認される際の前提となる。継嗣が果たすべき死後の報恩とは、忌日の他、盂蘭盆と歳末の墓参であり、貴族層においては十世紀の初頭には行なわれていたと見られる。神宮の神職層においても貴族と同様、子から親への追善が右のような意義を持つて営まれていたと思われる。経塚における回忌供養は、如法経作法にも規定されており、小町塚が度会氏の墓所であるとすれば、埋経がそもそも度会常行の回忌供養を契機として営まれた可能性もある。つまり、万覚寺の勧進とは言え、檀越の側が主導する側面が大きかつたのではないかと思われる。

三重県伊勢市朝熊町朝熊山の十九号経塚の例を見てみよう。この埋経は常勝寺比丘尼真妙の勧進に基づくもので、助成・執筆には「常覚寺之僧」があたつてゐる。檀越としては、度会・一志・大宮・伴の諸氏があつた。

【史料9-1】平治元年(一一五九)紙本経奥書(『経』二四八)

平治元年八月十四日雅彦尊霊

為出難生死往生極楽書写了

執筆僧殿

【同12】平治元年(一一五九)紙本経奥書(『経』二四七)

為雅彦尊霊成仏得道也

ここでは、度会雅彦の極楽往生・成仏得道が願われている。「豊受太神宮禰宜補任次第」(『神道大系』神宮編五)には「二禰宜従四位下度会神主雅彦」が「平治元年四月十五日卒」とある。彼の死去したのは、埋経が行なわれた年の四月であり、この埋経は雅彦の葬儀を直接の契機としているのである。したがって、常勝寺の勧進とはいえ、檀越の側の宗教的欲求に引きずられる部分も大きかつたと思われる。『沙石集』巻一第九には、

【史料10】

和州山里に或百姓ありけり、草堂を建て供養の導師は西大寺の思縁上人を請じて供養す、願文に廻向の詞のありける聞て申けるは「此堂は故うばにして候物の為に如形造立仕候ぞ、法界の衆生の御廻向候はゞ、うばめはあたりもつき候わじ、只故うばにと御廻向候へ」(後略)

という説話がある。檀越にとつては、「うば」(祖母)の追善が第一であり、「法界衆生」のため、という寺院の側の言辭はこれによつて骨抜きにされている。「一切衆生平等利益」というような経塚資料の常套句の裏には、右のような檀越による亡者追善への切実な願望が存在したのである。

以上、推測を重ねてきたが、瓦経が小町塚に埋納されたのは、そこが度会氏の墓所であつたからではないかという推定を行なつた。また、寺院側の勧進という形態をとつていても、実際には檀越の側の欲求が潜在しており、祖先への思慕が強かつたこと、「没後報恩」の営みが社会的に強く意識されていたことがうかがえる。

もともと在地における葬儀(特に埋葬)は、一般に直系の親族もしくは配偶者のみが行なうものであつたが、埋経供養によつて寺院の介入が容易となり、さらに墓所における回忌や盂蘭盆の供養も可能となつている。埋経は、一個人の追善という目的によつてなされることもあるが、それが寺院にとつての「結縁」である以上、勧進により地域の人々が供養に奉加することは、他史料に見るように一般的な形態になつていた。伊良胡においては、度会氏への供養を原基として寺院が勧進を行い、荘官名主の階層に当たる人々が「結縁」して、それぞれ父母・祖父母への追善を願つている。このように他者もまた供養に「結縁」し、その都度父祖の往生を願うことは、在地における個々の家系が、前述のような「没後報恩」の正当性を確認しあう意義を有したのではないかと思われる。埋経供養は墓所と寺院を結びつけただけでなく、地域における複数の家の親族を束ね、相互にその直系的な結合を高めるといふ社会的な意義を有したと推測されるのである。

したがつて、伊良胡における埋経供養が、一回限りのものであつたとは思えない。檀越の中心が度会氏であつたため、埋経そのものは伊勢でなされたが、その他の結縁者にとつて、埋経がなされるべき場所は、やはり伊良胡の内部であろう。御厨内部には少なくとも三ヶ所の古窠があり、そのうち皿焼古窠の二号窠からは、鎌倉期のものと思われる陶製五輪塔が出土している。ここから、後代にも窠が寺院の需要と結びついていたことをうかがわせる。一方、隣荘域に含まれる天台宗の泉福寺には、五輪塔・宝篋印塔を含む七十七基の中世墓があり、渥美焼の骨壺が出土している。また、東大寺瓦窠跡の北方「石堂山」には経塚様の遺構が存在し、古鏡が出土している他、近世にも伊良胡明神の付近に法華経八百巻を埋めた「経塚」の伝承が存在した。考古学的裏付けはまだ不足しているが、御厨の領域において、その後も墓所における埋経供養が存続したことは推定してよいのではないかと思われる。

小 結

以上、小町塚出土瓦経につき考察を重ねてきた。

瓦経に見える人名については、勸進と瓦経作成の場が万覚寺であり、工人も伊良胡の人間であること、檀越・施主の中には、経済的基盤を伊良胡に置き、伊勢湾における活発な交通を前提として、伊良胡住人と血縁関係を持つ者があつたこと、などの事実から、従来よりも伊良胡の側の比重を大きく考えなければならぬことを指摘した。また、埋経供養の動機としては、度会氏の墓所における供養を重視し、これに加わつた人々にとっては、供養に結縁して父母の往生を願うことで、相互の家における「没後報恩」の営みを確認し合ひ、觀念上の直系的結合を強める社会的機能があつたことを推定した。無論、ここで考察した埋経供養は、寺院の年中行事的なものではなく、むしろ臨時供養としての性格が強い。史料7のように、埋経を契機として毎年の墓上祭祀が行なわれる例もあるが、なお普遍的なものとは言い難い。

しかし、在地寺院と住人との関係、および修法にこめられた心意については、ある程度の類推が可能なのではないだろうか。在地寺院の周辺には、荘官名主層を中心とする「檀越」の集団が形成されており、在家の優婆塞に相当する半僧半俗の者も見られる。つまり、檀越集団は寺院の組織自体にも相当に入り込んでいる。その彼らによつて、寺院でとり行なわれる最大規模の供養が埋経を伴う如法経供養であり、そこに彼らの最も切実な願望が表現されていると見るべきである。それは父祖の「没後報恩」と自身の往生への願望であり、さらにそれは極めて社会的な営為によつて達成される。寺院法会は、聖俗の融和的参加によつて、往生願望の個別性と社会性を結びつける機能を有したのである。孟蘭盆や歳末の墓参などの年中行事も、右の観点から位置付けられるべきであろう。五節供など国家的年中行事に由来するものを除けば、在地寺院における修法とは、まず以て右の過程により参加層の追善・往生願望を充足させるものと意義付けられるのである。

註

- (1) 『考古学講座』雄山閣出版、一九二七。
- (2) 関『経塚の諸相とその展開』雄山閣出版、一九九〇。
- (3) 「経塚の营造について」『史学雑誌』六七―一二、一九五八、同「平安時代埋経供養の一形態」『日本歴史』一八一、一九六三、同『経塚論攷』雄山閣出版、一九八三。
- (4) 「地方寺社と地域信仰圏」『ヒストリア』九七、一九八二、

- 「中世如法経信仰の展開と構造」『中世寺院史の研究』上、法蔵館、一九八八。
- (5) 「国学院大学蔵『瓦経』片の復原研究」『国学院雑誌』七八一九、一九七七、同「国学院大学蔵『瓦経』の復原研究・補記」『国学院雑誌』八〇―四、一九七九、同「奈良国立博物館蔵を主とする瓦経の復原」『南都仏教』四二、一九七九、同「東大寺伊良胡瓦窯跡出土の瓦経の復原」『南都仏教』四七、一九八一、同「伊勢小町塚出土の瓦経について」『東方学論集』小野勝年博士頌寿記念会、一九八二。
- (6) 「伊勢小町塚経塚の研究」『三重考古』三、一九八〇、同「伊勢小町塚瓦経の復原研究」『国学院雑誌』九一―九、一九九〇。
- (7) 『経塚遺文』東京堂出版、一九八五。
- (8) 「伊勢国の瓦経」『考古学会雑誌』三一―二、一八九九、同「伊勢発見の瓦経」『考古界』二―一二、一九〇三。
- (9) 石田前掲・註(1)、佐藤「伊勢国の経塚」『史林』二〇―一、一九三五。
- (10) 奥村秀雄「伊勢地方における埋経」『MUSEUM』一六七、一九六五、同「伊勢地方出土の瓦経」『陶説』一四三、一九六五、同「伊勢小町塚出土の瓦経」『考古学雑誌』五三―二、一九六七。
- (11) 和田前掲・註(6)。
- (12) 「豊受大神宮禰宜度会氏の経塚造営とその周辺」『福島考古』三〇、一九八九。
- (13) 早稲田大学蔵。『経塚遺文』二八六。以下『経』。
- (14) 拓影。『経』二九三。小町塚とは別個の「菩提山」出土のものとして扱われることが多いが、近年では小町塚出土のものと同一と見做してよいとされる。関・前掲註(2)。
- (15) 渥美郡田原町加治の坪沢古窯群から出土した甕や壺の肩部には「万」の字が範書されており、万覚寺との関係も想定されているが、所在自体は伊良胡御厨の領域内と考えるべきであろう。和田・前掲註(6)。なお、伊良胡について、「郷」と「御厨」という二つの表現が見られるが、前者は一般・通称地名であり、後者は伊勢の側から見た経済単位としての地目を表現しているのではないだろうか。
- (16) 字瓦場の他、田戸・小森・寺山・清水・東丸田など中山湊の周辺からも発見されている。『渥美町史』歴史編・上、二四五頁参照。
- (17) 『渥美町史』歴史編・上、二六八頁参照。
- (18) 『渥美半島埋蔵文化財調査報告書』瓦場遺跡群、渥美町

- 教育委員会、一九六六、網干・前掲註(5)、駒井銅之助「伊良湖崎の東大寺瓦」『歴史考古』一七、一九六九。
- (19) 『渥美半島埋蔵文化財調査報告書』伊良湖東大寺瓦窯群、渥美町教育委員会、一九六七。
- (20) 後藤守一「三河に於ける見聞(二)」『考古学雑誌』一四一四、一九二四。
- (21) 『経』三二二。奥村秀雄「経塚研究の一視点」『大和文
化研究』八一八、一九六三。
- (22) 中村・前掲註(12)、同「岩代承安経筒銘に見える藤
井姓について」『大和文化研究』一〇一五、一九六五。
- (23) なお奥村・前掲註(10)。
- (24) 銘文には、さらに「地藏堂」が見えるが、これが如何な
る文脈で記されているのか判断がつかかねるため、今後の課題
としたい。
- (25) 『経』三一。『経』二八二では「氏子主」。
- (26) 「豊受太神宮禰宜補任次第」『神道大系』神宮編五。
- (27) 「類聚大補任」『豊受太神宮禰宜補任次第』(前掲)、
「度会氏系図」『統群書類従』七・下、など。
- (28) 「類聚大補任」正治二年項、「二所大神宮例文」第十二
『神道大系』神宮編五。
- (29) 中村・前掲註(12)。
- (30) 史料①の表から裏への移行部と史料②との比較による。
なお「員」というのは彼女の名であるらしい。
- (31) 『経』三〇三。
- (32) 『経』三〇三では「源小丈」の名乗りがある。
- (33) 史料②の「日親」を国親の誤記と解する。
- (34) 和田・前掲註(6)。
- (35) 関・前掲註(2)。
- (36) 和田・前掲註(6)。
- (37) 『経』二八二、二八三、二八四、二八六、二八九、二九
二。
- (38) 或いは、夏安居の法華経供養として行なわれたのかわし
れない。『日本霊異記』上・第一一、同第二十三。
- (39) 「神宮雑書」『神宮古典籍影印叢刊』神宮神領記。
- (40) 諸系図には「貞材」とするものが多い。
- (41) 和地の集落は和地荘域と考えられている。『渥美町史』
歴史編・上。
- (42) 久永春男「藤原古墳群の歴史的背景」『渥美半島埋蔵文
化財調査報告書』藤原古墳群、渥美町教育委員会、一九八八。
木簡については、『平城宮第十三次発掘調査出土木簡概報』一

- 九六三、『平城宮発掘調査出土木簡概報』一〇、一九七五、同二四、一九九一。
- (43) 『西の浜久衛森遺跡』同調査団、一九八〇。
- (44) 『夫木和歌抄』巻題廿六、参西法師「我恋はいらごが崎の海人なれややくしほがまのけぶりたえねば」ともある。
- (45) 白水智「中世海村の百姓と領主」『列島の文化史』九、一九九四、山本隆志「荘園制の展開と地域社会」『刀水書房、一九九四。
- (46) 歌川学「三河国の条里制」『伊勢湾岸地域の古代条里制』東京堂出版、一九七九。
- (47) 福岡猛志「三河湾『海部』『贛』木簡の諸問題」『歴史の理論と教育』七二、一九八八、赤塚次郎「海部郡と三河湾の考古学」『海と列島文化』八、小学館、一九九二。
- (48) 網野善彦「太平洋の海上交通と紀伊半島」『海と列島文化』八、小学館、一九九二、稻本紀昭「伊勢・志摩の交通と交易」同前、荒木敏夫「東への海つ道と陸つ道」同前、綿貫友子「神人と海運」『中世の地域社会と交流』吉川弘文館、一九九四、永原慶二「熊野・伊勢商人と中世の東国」『日本中世政治社会の研究』統群書類従完成会、一九九一、など参照。
- (49) 和田萃「東国への海つ道」『環境文化』五一、一九八〇、荒木敏夫「東の海つ道と伊良胡」『静岡県史研究』三、一九八七。
- (50) 『神宮古典籍影印叢刊』神宮神領記。
- (51) 『神宮古典籍影印叢刊』神宮神領記における「諸国御厨御園帳」では「候」の字は「隻」と読める。
- (52) 「類聚大補任」寛元二年によると、度会貞春の三男で貞朝は養父である。
- (53) 棚橋光男「中世伊勢神宮領の形成」『日本史研究』一五五、一五六、一九七五。
- (54) 「光明寺文書」正応五年(一二九二)五月五日度会益房処分状案、『鎌』二三・一七八八六。
- (55) 「豊受太神宮禰宜補任次第」『神道大系』神宮編五。
- (56) 棚橋・前掲註(53)。
- (57) 『勘仲記』正応元年(一二八八)七月巻裏文書・某請文(『鎌』二二・一六六八三)参照。相論については市沢哲「鎌倉後期の公家政権の構造と展開」『日本史研究』三五五、一九九二、および海津一朗「正安の伊勢神宮領興行法と公武関係」『史学雑誌』一〇一・一九九二、同「弘安の神領興行法と東国諸御厨」『地方史研究』二三九、一九九二、参照。
- (58) 『吾妻鏡』同年同月二十三日条。

- (59) 海津一朗「伊勢神宮の荘園制」『中世の変革と徳政』吉川弘文館、一九九四。
- (60) 前掲註(42)『渥美半島埋蔵文化財調査報告書』。
- (61) 『渥美町史』歴史編・上巻。
- (62) 「高倉院敷島御幸記」(『群書類従』一八)における賀茂社領室御厨の例、参照。
- (63) 近世、中山神明宮の神主は確実に荒木田氏である。中山区有文書、寛永十五年(一六三八)中山神明宮修造棟札。
- (64) 関秀夫「『経塚』の概念」前掲註(2)書。
- (65) 三宅敏之「経塚の発生とその展開」前掲註(3)書。
- (66) 保阪三郎「卒塔婆と経塚」『考古学雑誌』四二・四、一九五七、景山春樹「横川における如法写経と埋経」『考古学雑誌』五四―三、一九六九、兜木正亨「経塚埋納の経典」『考古学ジャーナル』一五三、一九七八。
- (67) 関根大仙「埋納経の内容としての法華信仰」『埋納経の研究』隆文館、一九六八。
- (68) 高木豊「八願文V研究序説」『法華経の文化と基盤』平楽寺書店、一九八二、「願文・表白にみる法華信仰」『法華仏教の仏陀論と衆生論』平楽寺書店、一九八五。
- (69) 『拾遺往生伝』下・一四。
- (70) 「如法経現修作法」『大正新修大藏経』第八四、「門葉記」如法経の項、『大正新修大藏経』図像部第一。
- (71) 永延三年(九八九)秋田県弘法畑出土双鳳八稜鏡銘、『平安遺文』金石文編七八、延久三年(一〇七一)長崎県壱岐郡郷ノ浦町田中触出土石仏像銘、『経』二三、康和四年(一一〇二)萩市大井出土銀経筒、『経』三九。
- (72) 赤松俊秀「藤原時代浄土教と覚超」『続鎌倉仏教の研究』平楽寺書店、一九六六、初出一九六三。
- (73) 前掲『本朝台祖撰述密部書目』。
- (74) なお、応徳三年(一〇八六)備前安養寺瓦経の末尾三行は『往生要集』三巻の末尾および「八箇条起請」中のものと同文である。間壁忠彦・間壁葎子「願文より見た瓦経塚造営の意趣」『岡山史学』一五、一九六五。
- (75) 清涼寺釈迦像胎内文書、天禄三年(九七二)閏二月三日。齋然結縁状、『平』九・四五六五。但し、化城喩品にこの語はなく、むしろ『法華玄義』巻六、『法華義疏』第三などに現れる語である。
- (76) 「知識」については、竹内理三「上代に於ける知識に就いて」『史学雑誌』四二―九、一九三一、中村明蔵「奈良時代の民衆仏教についての一考察」『続日本紀研究』六一―一二、一

- 九五九、井上正一「奈良朝における知識について」『史泉』二九、一九六四、藺田香融「古代仏教における宗派性の起源」『平安仏教の研究』法蔵館、一九八一、初出一九七二、中井真孝「古代における共同体と仏教」『日本古代仏教制度の研究』法蔵館、一九九一、初出一九七四、根本誠二「奈良仏教の僧侶と知識」『奈良仏教と行基伝承の展開』雄山閣、一九九一、初出一九八〇、など参照。
- (77) 大阪府和泉市池辺家所蔵。赤松・前掲註(72)の紹介による。前半は写本、後半は原本。
- (78) 「門葉記」如法經二、『大正新修大藏經』圖像部一一。
- (79) 関秀夫「初期の埋経」前掲註(2)書。
- (80) 間壁、間壁・前掲註(74)。
- (81) なお、小原仁「中世における埋経の展開とその基調」『日本歴史』三〇七、一九七三、杉原和雄「経塚遺構と古墓」『京都府埋蔵文化財論集』一、京都府埋蔵文化財調査研究センター、一九八七、参照。
- (82) 中村・前掲註(12)。
- (83) 『角川日本地名大辞典』三重県、佐藤・前掲註(9)。
- (84) 山村宏「一の谷中世墳墓群の発掘」『中世の都市と墳墓』日本エディタースクール出版、一九八八。
- (85) 藤澤典彦「墓地景観の変遷とその背景」『日本史研究』三三〇、一九九〇。
- (86) 藤澤典彦「中世墓地ノート」『仏教芸術』一八二、一九八九。
- (87) 浦口町連合会所蔵。屋蓋・軸部・台部の計八片が発見されており、復元した場合の推定高は約一メートルである。
- (88) 経塚は地上標識を持ち、これは更に五輪塔などの供養塔へ発展することもあった。寛弘四年(一〇〇七)藤原道長埋納経筒銘(『経』一)、『御堂関白記』同年八月十一日条、『玉葉』養和二年(一一八二)四月十六日条、参照。
- (89) 高橋秀樹「在地領主層における中世的『家』の成立と展開」『日本中世の家と親族』吉川弘文館、一九九六。
- (90) 「東大寺文書」四ノ三九、元暦元年(一一八四)十月賀茂姉子解、『平』八・四二一四。なお、西谷地晴美「中世的土地所有をめぐる文書主義と法慣習」『日本史研究』三二〇、一九八九、西尾和美「日本中世における家族と家族イデオロギ」『ヒストリア』一三三、一九九一、参照。
- (91) 「施無畏寺文書」弘安十年(一二八七)四月八日仏心田地寄進状、『鎌』二一・一六二三六。桃裕行「忌日考」『国民生活史研究』五、一九六二、佐野知三郎「中世の忌日」『史迹

- と美術』五二六、一九八二、藤澤典彦「墓上祭祀の諸問題」
『月刊歴史手帖』一九一一、一九九一、参照。
- (92) 服藤早苗「平安貴族層における墓参の成立」『シリーズ比較家族』二、家族と墓、早稲田大学出版部、一九九三。
- (93) 吉田清「庶民信仰としての如法経」『源空教団成立史の研究』名著出版、一九九二、初出一九六七。
- (94) 勝田至「中世民衆の葬制と死穢」『史林』七〇一三、一九八七、同「村落の墓制と家族」『家族と女性』吉川弘文館、一九九二、参照。
- (95) 孟蘭盆における世俗と寺院の関係については『今昔物語集』巻二四第四九、『沙石集』巻八第九。
- (96) 小野田勝一「陶製五輪塔」『知多古文化研究』一、一九八四。また、皿山古窯群については、『豊川用水路関係遺跡調査報告』愛知県、一九六四。
- (97) 『渥美町史』考古・民俗編、四二六頁。
- (98) 前掲『伊良胡名所記』。